

1785年のウィルバーフォース

久保光彦

死期が間近に迫ったメソジストの指導者ジョン・ウェスレー(1703-1791)が、その生涯の最後の手紙となる書簡を認めた相手は、イギリスの国会議員として活動していたウィリアム・ウィルバーフォース(1759-1833)であった。その手紙はこのような内容である。全文を掲載する。

バラム、2月24日 1791年

拝啓、

もしも神の力が「世界に対抗するアタナシウス¹」となるべくあなたをお立

¹ 原文では“*Athanasius contra mundum*”と記されている。アレクサンドリアの司教であったアタナシウスは、正統の三位一体の教義を断固として死守し、アリウスやサベリウスなどの異端的な神学者との妥協を拒んだがために、時の皇帝コンスタンティヌスによって当時のローマ帝国の最西端であるドイツのトリールに流罪の身となった。コンスタンティヌス以外の皇帝の時代にも、アタナシウスは数度アレクサンドリアからの追放を経験している。そこまでの仕打ちを受けても彼が断固死守しようとしたのは、ニケア公会議の三位一体理解において非常に重要である、父と子は「等しく神であり一つの物質を共有する」*homo* (同じ) *ousios* (物質) という神学的概念であり、それは当時の異端が持っていた「父と子は *homoi* (似たような) *ousios*

てになったのでなければ、英国の宗教と人間性の醜聞である嫌悪すべき悪行に対抗する、その輝かしい事業をあなたがどのようにしてやり遂げるか、私には見当もつきません。神がまさにこの事のためにあなたをお立てになったのでなければ、人と悪魔の反対によってあなたは擦り減ってしまうでしょう。しかし、神があなたと共にいるのなら、だれがあなたに対抗できるでしょうか。相手を束にしたとして、神よりも強力だということでしょうか。ああ、良いことを行うことに疲れてはなりません。神の名とその権能の力のうちに進み行きなさい、(日の目を見た中で最も墮落している) アメリカの奴隷制がその眼前から消え去るまでに。

今朝、哀れなアフリカ人によって書かれた小冊子を読んでいるとき、白人によって不正を働かれ辱めを受けている黒い肌を持つ人間は、いかなる救済手段も持ちえないという状況に、わたしは打ちのめされました。植民地において、黒人の白人に対する誓約は何にもならないという「法」があるからです。一体この非道は何なのでしょう？

あなたの若き日からあなたを導いてきた方が、この事そして全てにおいてあなたを力づけ続けられるように、というのが私の祈りです。

あなたの親愛なるしもべ、ジョン・ウェスレー²

(物質)」という準サベリウス主義的な考え方とは似て非なる性質を持つ。homoousios の場合、イエスの神性は確立されるが、homoiousios の場合、イエスは神の「ような」ものとされてしまい、神性の否定につながるものであり、正統の三位一体の教義にそぐわない。アタナシウスはこのたった一文字の違いに執拗にこだわり正統の神学を守り抜いた。その困難な戦いの中における頑固な姿勢が、奴隷制に対して動くウィルバーフォースを「世界に対抗するアタナシウス」とウェスレーに言わしめた所以と思われる。詳しくは Roger E. Olson, *The Story of Christian Theology: Twenty Centuries of Tradition and Reform*. (Downers Grove: IVP Academic, 1999)などを参照。

² <http://gbgm-umc.org/umw/wesley/wilber.stm>

この手紙が書かれたとき、ウェスレーは88歳、ウィルバーフォースは32歳であった。この世から去りゆこうとしているウェスレーは、奴隷制について「英国の宗教と人間性の腐敗」と断罪し、「世界に対抗するアタナシウス」のようにその忌むべき悪習に立ち向かっている若きウィルバーフォースを激励する手紙を書き残した。

ノーマン・サイクスは、ウェスレーがこの手紙を記してから実に一週間もしないうちにこの世を去ったことについて触れた上で、このように述べる。

それゆえ彼が最後に書いた戒めは、台頭してきたキリスト教会の社会的良心を最も顕著に表す改革運動を貫徹するよにという、イングランド教会の指導的立場にいた福音主義の信者に対して送られた励ましの言葉となった。³

サイクスの指摘が正しいとすると、ウィルバーフォースの奴隷貿易廃止運動は、「台頭してきたキリスト教会の社会的良心を最も顕著に表す改革運動」のひとつであった。サイクスが指摘するように、その特徴として、ウィルバーフォースはホイットフィールドやウェスレーのような聖職者階級に属するものではなく、いわゆる福音主義派(Evangelical)信徒であったことである。

ウィルバーフォースは、イギリスにおける奴隷貿易の廃止を勝ち取り、また奴隷制の廃止に先鞭をつけた。それは確かに聖職者階級に属さないクリスチャンによってなされた社会改革運動の一つの大きな分水嶺となるものである。しかし、それはあくまでも歴史を逆行的に見た時に立ち上がる結果論であって、ウィルバーフォースがどのような経験を転換点として、奴隷貿易廃止に向けて政治家としての働きを開始したかを考察することなしに、功績だけを見るのはあまりに短絡的であり、ウィルバーフォースの政治活動の本質を捉えていることにはなり得ない。

そのような事柄を踏まえ、この小論では、特にキリスト者としてのウィルバ

³ ノーマン・サイクス著、野谷啓二訳、『イングランド文化と宗教伝統一近代文化形成の原動力となったキリスト教一』（東京、開文社出版、2000）

ーフォースの信仰体験（直接的に言うならば実際の回心経験）に注目し、彼の回心体験がどれほどその後の人生に影響を及ぼしていたかを考察していく。

I. イギリスにおける奴隷貿易

ウィルバーフォースの尽力により、イギリスにおける奴隷貿易は1807年に廃止された。その後、奴隷制自体も、ウィルバーフォースの死の三日前という時であったが⁴、1833年に大英帝国の中から廃止された。本論ではウィルバーフォースの信仰的体験に焦点を絞って論ずるが、彼が廃止した奴隷貿易ならびに奴隷制について、簡単に理解しておくことが肝要であると思われるので、まず短くイギリスにおける奴隷貿易と奴隷制について整理しておきたい。

はじめに、イギリスにおける奴隷制と奴隷貿易の違いについて述べる必要がある。イギリスは大英帝国として奴隷を売買し、またイギリス本国自体でも奴隷を使用していたことは事実であるが、この二つに関しては似て非なるものであるので正確を期すためにいくつかのことを述べる。

アメリカにおける奴隷制と大きく異なることは、イギリスが輸入した奴隷の数は、イギリスが奴隷貿易で輸送した数に比べると圧倒的に少ない事である。1556年から1846年に、イギリスがアフリカ大陸から輸出した奴隷の総数は、309万6827人であるという統計がある⁵。しかし、このすべてがイギリス本国へ輸入されていたわけではない。デイヴィッド・エルティスなどによると、1501年から1900年までイギリスを含む奴隷貿易に関係した国々の奴隷貿易によって大西洋を越えた奴隷の数は1257万人とされているが、ヨーロッパ大陸へ輸入されたのはその内僅か5万人という統計が出ている⁶。川北稔は「多いときには、ロンドンには一万人以上の黒人の召使いがいたのではないか」と推察している

⁴ Eric Metaxas, *Amazing Grace: William Wilberforce and the Heroic Campaign to End Slavery*. Harper: New York, 2007 274-275

⁵ <http://slavevoyages.org/tast/database/search.faces?yearFrom=1514&yearTo=1866&nataniminip=7>

⁶ David Eltis and David Richardson, *Atlas of the Transatlantic Slave Trade*. Yale UP: New Haven, 2010. 4

が⁷、奴隷貿易全体で運搬された総数と比較するときに、ヨーロッパへ輸入された数はごく一部であると言える。

アフリカ大陸から輸出された奴隷たちは、ヨーロッパ大陸に輸送されるのではなく、そのほとんどが、カリブ海周辺諸国や北・南米へと輸入されていった。彼らが向かった先にあったものは、砂糖のプランテーションであった。

砂糖は、特にイギリスで紅茶と共に珍重され、当時のイギリス社会にとって欠かすことのできない存在になっていった。しかし、砂糖の原料であるさとうきびをイギリス本国で栽培することはできない（紅茶の栽培もプランテーションに依存するしかなかったのは皮肉としか言いようがない）。それゆえに、安価な労働力としてアフリカ大陸から黒人がカリブ海域のプランテーションに送り込まれ、さとうきび畑で酷使され続けていたのである。

この奴隷貿易を含む大西洋をまたいだ貿易の事を、一般的に「三角貿易」と称することがある。その仕組みは川北によれば以下のとおりである。

たとえば、イギリスのリヴァプールを出発した奴隷貿易船は、奴隷と交換するために、アフリカの黒人王国が求める鉄砲やガラス玉、綿織物などをもっていきました。それらを西アフリカで、奴隷と交換したわけです。ついで、獲得した奴隷を悲劇の「中間航路」にそって輸送し、南北アメリカやカリブ海域で売り、砂糖（まれに綿花）を獲得して母港リヴァプールに帰るのです。このひとつづきの貿易を歴史家はしばしば「三角貿易」と呼んできました⁸。

引用中に言及のある「中間航路」というのは、「アフリカから大西洋をこえて、ジャマイカやバルバドスに運ばれる時の、航海」⁹である。ウィルバーフォースはこの「中間航路」での奴隷の扱いの陰惨さについて、1789年の奴隷貿易の廃止に関する国会における演説でこのように述べている。

⁷ 川北稔、『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書、岩波書店、東京、1996年。

⁸ 前掲書、54頁。

⁹ 前掲書、53頁。

・・・私は、西インド諸島における奴隷の運搬について述べなければなりません。ここが、私の意見では、この件（奴隷貿易）に関してもっとも陰惨な部分なのです。数多くの窮状がこの中にあり、それは人間の想像力がかつて思い描いたもの以上なのです。[中略] 600 から 700 人の哀れな者たちが、2 人ずつ鎖につながれ、吐き気と嫌悪感を催させるあらゆる物質に囲まれ、病に打たれ、ありとあらゆる種類の惨めさの下でもがき苦しんでいる様子を想像していただきたいのです！ どうやったらこのような光景について考えることを耐えることができるでしょうか？¹⁰

これはあくまでも「中間航路」の航海条件に関する指摘であるが、川北は航海後の条件についてはこのように指摘している。

せっかくカリブ海の島の浜辺までたどりついた奴隷のうち、数十パーセントの者が、こうして「現地慣れ」（英語では「シーズニング」といいます）の期間に亡くなってしまったのです¹¹。

つまり、「三角貿易」の中の「中間航路」を通る奴隷運搬は、過酷な条件の中で行われ、「中間航路」で運搬される奴隷の条件は劣悪であり、運搬中も運搬後も致死率は極めて高かったことを見ることができるのである。

エルティスなどの調査によれば、この劣悪な環境というものはさらに具体性を増す。1563 年から 1810 年の間にイギリス船籍の奴隷船によってアフリカから輸出された奴隷の数と、実際に現地に荷卸しされた奴隷の数の比較の統計が出ているが、そこには 52 万余（乗船時 326 万一下船時 273 万）の数字の違いがある¹²。つまり、イギリスの奴隷船に乗せられてアフリカを出港してから「中間航路」を通る段階で、52 万人（実際にはもっと多いことが予想される）の黒人が命を落としていることになる。そして、その船内の状況は先ほど触れたようにウィルバーフォースが国会での演説で糾弾したように衛生観念などからは

¹⁰ http://abolition.e2bn.org/file_download.php?ts=1196553600&id=207

¹¹ 川北、53 頁。

¹² Eltis et al. 32

程遠い筆舌に尽くしがたい状況を呈していたのであり、川北が指摘するように、航海後の生存率も高いとはお世辞にも言えない。そのような状況を鑑みるときに、ウィルバーフォースはその演説の冒頭で述べたように、「私たちはみな有罪なのです¹³」と宣言するのである。

しかし、ウィルバーフォースが活動した時代は、植民地を数多く持つ大英帝国としてのイギリスが栄えていた時期であり、砂糖製造にとって欠かせない奴隷の売買などを廃止するという事は、言うなれば国益に反する事とも取られかねない事であった。そのような社会的状況の中にあつて奴隷貿易の廃止を提唱することは、決して生半可な気持ちで達成出来ることではない。しかし、ウィルバーフォースは、ウェスレーが「世界に対抗するアタナシウス」と描写した如く、この問題に立ち向かったのである。

II. 1785 年以前のウィルバーフォース

ウィルバーフォースはハルに生まれた。彼の祖父もその名をウィリアムといい、その祖父の成功により、18 世紀にウィルバーフォース家はバルチック海交易などによって隆盛をなした¹⁴。ここで少し、メタクサスの筆によるウィルバーフォースの幼少時代を引用する。

ウィリアム・ウィルバーフォースは、両親にとっては四人兄弟の三番目として生まれ、唯一の男子であった。彼が 8 歳の時に、一番上の姉のエリザベスが亡くなる。彼女は 14 歳で、ロンドンの一流の寄宿舎学校に入っていた。彼女の死後しばらくして、ウィルバーフォースの母は四番目の子供となるもう一人の女子を産む。しかしその数か月後に、彼女の夫が 40 にして突然他界するのである。その数か月後、ウィルバーフォースの母親は熱を伴った病にかかり、ウィリアム—当時は「ピリー」と呼ばれていたが—は、ウィンブルドンの叔父のウィリアムと叔母のハナと共に暮らすの

¹³ http://abolition.e2bn.org/file_download.php?ts=1196553600&id=207

¹⁴ Metaxas, 3.

が望ましいと決められたのである¹⁵。

ウィルバーフォースの幼少時代は、少なくともこの側面だけを見る限りでは、あまりに悲しい。姉を失い、父を失い、病のためとはいえ母と離れて、叔父夫婦と暮らすことになるのは、洋の東西を問わずあまり幸福な物語には見えない。しかし、この物語の悲しき側面は、その後ウィルバーフォースが歩む人生にとってある意味では必要なものであったのかもしれない。彼が叔父・叔母と住むことによって、両親と住んでいた環境とまるで異なる場所に身を置くことになったのは、ある意味で摂理のようにも捉えることができるからである。その理由は例えばウィリアムとハナがどのような人物であったかを知る時におぼろげながら見えてくる。

かれら（訳注：ウィリアムとハナ）は、英国のみならず大西洋を挟んだ13州の植民地を変革した「大覚醒」として知られる社会的激震の背後にあった主要な人的力であり18世紀の重要人物の一人であるジョージ・ホイットフィールドと親しい交友関係にあった。彼らはまた、かつては奴隷船長であり讚美歌「いかなる恵みぞ」を書いた人物として現代世界のほとんどに認知されている、偉大なジョン・ニュートンとも密接な交友があった。幼いウィルバーフォースに奴隷制についての最初の知識を与えたのは彼である¹⁶。

このように、親と離れて暮らすことになったウィリアム・ウィルバーフォースではあるが、そこには少なくとも幾ばくかの（主に霊的な意味で）肯定的な側面があったことを見ることが出来る。特に、後年のウィルバーフォースの奴隷貿易の撤廃に向けての動きを考えると、ウィルバーフォースとニュートンが、ウィルバーフォースの幼少期に出会っていたことは非常に興味深い事実である。しかし、「ウィルバーフォースの母と祖父が叔父と叔母と暮らすように彼を送った時、彼らは少年をメソジズムの輝く温床へと送り込んでいるなどは

¹⁵ *ibid.*, 7.

¹⁶ *ibid.*, 6-7.

考えもしなかった¹⁷」とメタクサスは記す。メタクサスはこうも記す。「福音主義派と呼ばれるようになったその動きは 18 世紀中期のイギリスの文化的社会的の上流階級からは嫌われていた。蔑称としては「メソジスト」や「熱狂主義者」というものがあった。¹⁸」このような社会的背景がありながら、ウィルバーフォースの母と祖父が、ウィリアムとハナのところにウィルバーフォースを送ったのは、単純に、背景調査の欠落の産物ともいえるが、そこには、人知を超越した摂理を見ることができる。祖父のウィルバーフォースがハナとウィリアムの宗教的環境を知っていれば、孫ウィリアムを彼らの所に送るはずがなかったのは、「もしビリーがメソジストになるのであれば、わしの金（財産）から一文も得ることはない。¹⁹」と祖父ウィリアムが言ったことが記録されていることから明白に伝わってくる。信仰的な夫妻と、その夫妻を取り巻く霊的巨人たちの社会の中でウィルバーフォースの幼少期は続くはずだったが、息子を送り込んだ先が宗教的な環境であると聞きつけた母エリザベスは息子を奪還する。結局、ウィルバーフォースは、2 年間、ウィリアムとハナとその宗教的感化の中で暮らした²⁰。しかし、エリザベスによってハルに連れ戻された後は宗教的なものから遠ざけようとする環境の中で過ごしたようである。ウィリアムは成長し、やがてケンブリッジ大学に入学する。もっともウィルバーフォースは大学時代には「勉強しなければならない時しか勉強せず²¹」残りの時間は楽しみや「社会勉強」に費やしていた。

「1779 年から 1780 年の冬季にかけて、ウィルバーフォースは多くの時間をロンドンで過ごすようになり、下院のバルコニーでピットとよく会うようになり、そこで座を占めて議論を見物するようになった。²²」とメタクサスは記す。

（ウィリアム・）ピットは、父親も英国の首相を務めた事のある家系の出で、このピットを通じて、ウィルバーフォースは政治に興味を持つようになっていく。ウィリアム・ピットはウィルバーフォースと同年齢であるが、父親が首相

¹⁷ *ibid*, 10.

¹⁸ *ibid*, 11.

¹⁹ *ibid*, 11.

²⁰ *ibid*, 12.

²¹ *ibid*, 18.

²² *ibid*, 20.

であったことから、幼い時から政治に親しんでいた。そのような背景のピットがウィルバーフォースにもたらした政治的影響は極めて重要なものであると考えることができる。

1780年の9月の下院議員選挙で彼はハルから出馬し、巧妙に「策略」が練られていたという理由もあるが、ウィルバーフォースはわずか21歳で下院議員の座を射止める。さらに特筆すべきことには、その3年後の1783年に、ウィリアム・ピットは若干24歳にしてイギリスの首相に選ばれるのである。

Ⅲ. 1785年のウィルバーフォース

若干24歳にして大英帝国の首相となったピットを友人に持つウィルバーフォースは、自身も類まれなる弁舌を生かして、議会での地位を確固たるものとしていった。メタクサスはこう記す。「ウィリアム・ウィルバーフォースは、齢24にして、イギリス議会の中で誰もが最も欲しがった議席を持っていた。彼を止めることは不可能にさえ見えた。彼の卓越した弁舌や才能そして魅力、そして首相が最も親しい友人であったことから、彼はどこまで登り続けるようにも思えた。²³」

1784年の秋に、ウィルバーフォースは、家族を伴ってその年の冬をコート・ダジュールとイタリアのリビエラで過ごす旅を計画する。その時、ウィルバーフォースは男性の同伴者を希望し、ある人物に打診をしたが、予定の調整がつかずに、代役が立てられることになった。その代役の名前はアイザック・ミルナーという。ミルナーがどのような人物であったか、メタクサスはこのように記している。

彼は後にケンブリッジ大学において、世界で最も有名な学術的地位である数学のルーカシアン教授の座を占めることになる。その地位には以前にアイザック・ニュートンなどがおり、未来のその座を占めるものとしてはポール・ディラックや、現在その座を占めているスティーブン・ホーキング

²³ *ibid.*, 42.

などがある。・・・また彼は学部生ながら王立協会員に選ばれることにもなる²⁴。

興味深いことに、アイザック・ミルナーとウィルバーフォースはこの機会に初めて会っているわけではない。前述したように、ウィルバーフォースの祖父はハルの名士であり、二度市長も務めているほどの実力者であったが、彼はハルのグラマー・スクールの校長としてアイザックの兄にあたるジョゼフ・ミルナーを若干23歳で抜擢している²⁵。そして、その時に弟のアイザックもハルにやってくるわけであるが、アイザックは当時まだ幼かったウィルバーフォースの教育係を務めることにもなる。そういった経緯があり、お互いに知らない間柄ではなかったということもあり、ウィルバーフォースのフランスとイタリアの旅行の同伴者としてミルナーが選ばれたのであろう。メタクサスも指摘していることだが、このミルナーとの旅を通しての語りあいがあるウィルバーフォースの人生を一変させることになるのは、ジョゼフ・ミルナーをグラマー・スクールの校長として抜擢したのが、宗教的理解がない祖父のウィリアムであったことを思うと非常に皮肉である²⁶。

ウィルバーフォースはおそらく知己の知識人というだけでミルナーを招いたに違いない。ウィルバーフォースの息子たちが記した伝記にも、ウィルバーフォース自身の著作からの引用があり、その中でも、当時のミルナーは決して（少なくとも表面的には）宗教的に見えた人間ではないことが記されている。

「ミルナーの宗教的主義は、理論のうえでは、今となっては、晩年のものと変わらないものだったが、その時はそれらの主張は彼の行動に実際的な影響を及ぼしているわけではなかった。あらゆる悪行の染みとは縁がなかったものの、他人よりも宗教に対して注意深くしているわけでもなかった。」（聖職者の身分ではあったものの、ニースに滞在中彼は祈祷文を読むことをただの一度も考えたことはなかった。）「彼はすべての面において、

²⁴ ibid, 4.

²⁵ ibid, 3-4.

²⁶ ibid,4-5.

世の中の一般的な人と同じに見えた。僕（訳注・ウィルバーフォース）と同じように、どのような集団にも溶け込み、日曜日に開かれる流行のパーティーに他の人と同じようにためらうことなく参加していた。実際、僕の旅行の同伴者として彼を引き込んだとき、僕は彼が深い部分で主義主張を持っているなどとは思ってもしなかった²⁷。」

ケヴィン・ベルモンテはこのように書いている。

ウィルバーフォースがミルナーを招待した時、彼はミルナーが深い主義を持っていることに気づいていなかった。イングランドを離れる前にスカーバラで夕食を共にするときまで、彼はそのことを知る事がなかった。会話はある福音主義派の一人でホザムの教区牧師であるジェイムス・スティリングフリートに及んだ。ウィルバーフォースは彼の事を「良い人物だが、物事を（訳注・おそらく宗教的な事柄に関して徹底的に）やりすぎるくらいのある人ですね」と言ったが、ミルナーは「いや。少しもそんなことはないね。」と答えた²⁸。

二人がこのような会話を交わすまで、ミルナーの内面をウィルバーフォースは把握していなかったのである。このミルナーとの旅が、その後のウィルバーフォースの人生そのものを決定的に変える契機となるのであるが、そのもっとも直接的な転換点となるのは、1785年の春に訪れる。現職（2013年現在）のイギリスの外務大臣であるウィリアム・ヘイグはそのウィルバーフォース伝の中でこの時期の事を以下のように記している。

（1785年の）2月5日にニースを去る直前に、ウィルバーフォースはミルナーに、彼がたまたま手にしたドッドリッジの『魂における宗教の勃興

²⁷ Robert Isaac Wilberforce and Samuel Wilberforce, Eds. *The Life of William Wilberforce*. Cambridge UP: Cambridge, 2010. 75

²⁸ Kevin Belmonte, *William Wilberforce: A Hero of Humanity*. Zondervan: Grand Rapids, 2007.73.

と発展』が一読に値するかどうかを尋ねている。ミルナーの答えは、「この本は今までに書かれた本の中でも最も素晴らしい本の一冊だ。旅に持って行って、道中読もうではないか」というものだった。

ウィルバーフォースのその生涯の中で、彼のいとこである（訳注・ともに旅行していたが、女性であったため別の馬車に終始乗っていた）ベッシー・スミスの持ち物の中から気軽に手に取ったこの本以上に、彼の行動を決める上で影響を与えた本はない。²⁹

ウィルバーフォースの息子たちの筆による伝記によれば、ウィルバーフォースはミルナーのその申し出を「快く引き受け、彼らはその本を注意深く読み、このような効果に伴い、彼（ウィルバーフォース）は将来しかるべき時期に自分自身で聖書を調べ、その本に記されていることが同じように（聖書に）書かれているかを調べることを決めた。この旅の間、彼はミルナーのみを伴っていた。³⁰」

ベルモンテはウィルバーフォースとドッドリッジの本の出会いについて以下のように述べる。

ドッドリッジの本を読むことがウィルバーフォースの大きな変化の長い過程における転換点となった。後年息子のサムエルに書いた中には「私はお前がドッドリッジの『勃興と発展』を読んでいるものと理解している。それ以上素晴らしい本を読むことはできない。この本は、私の心を神に向ける手段の一つだったと希望している。確かに、非常に有益な書籍は何冊かあった。」1822年に息子のロバートに向けて。「私の人生の非常に重要な時期に、摂理的な準備によって、私はその本と出会った。その一冊だけで非凡な利益をもたらす本であった³¹。」

²⁹ William Hague, *William Wilberforce: The Life of the Great Anti-Slave Trade Campaigner*. Harcourt: London, 2007. 73

³⁰ *The Life of William Wilberforce*, 76-77.

³¹ Belmonte, 74

ドッドリッジの『魂における宗教の勃興と発展』はどのような書物であったのか。ヘイグはこうまとめている。

フィリップ・ドッドリッジはこの本を 1745 年に出版した。[中略] ドッドリッジは、キリスト者の一致と宗教的寛容を擁護し、それは実際の信仰と力強い天の幻想を伴うものだった。[中略]ドッドリッジは本の中で宗教的省察の完全な枠組みといかに生きるべきかの哲学を提示し、当初それらの事はウィルバーフォースにただ考えさせるだけであったが、結果として彼の残りの生涯の枠組みをなすものとなった。『魂における宗教の勃興と発展』が強調したのは、日々の自己吟味、祈り、早朝の密室（デヴォーション）仕事における勤勉さ、余暇の過ごし方における儉約、注意深い摂理の観察、一人になることの重要性、そして時間の大切さであった³²。

この書物の中でドッドリッジはヘイグが指摘するように、実際の信仰生活、神中心の生活について論じている。この書籍の中心は、神中心の信仰生活と簡単にまとめることができるのかもしれない。『宗教の勃興と発展』（以下、『勃興』と略する）という堅苦しい表題が付けられているが、言い直すとするなら、この書は、個人の心の中に信仰心が芽生え、その信仰が成長する過程を、細かく区切って論じている書物ともいうことができるだろう。

ドッドリッジはこの本を伝道的な目的で記している。つまり、これは一般的な信仰書というより、信仰を持たないものが読み、この本を読むことをきっかけとして信仰を持つことを想定して書かれている本であるということができる。救いに関しての項目を少し見てみたい。彼は聖書に基づいてキリストによってもたらされる救いを論じたうえで、このように書いている。

これが、私が神のことばから学ぶ事が出来た限りの、安全と栄光への道なのです。あなたが歩むことのできる、最も確かで、ただ一つの道なのです。これはキリストに従う信仰的な教師がことごとく歩んできた道であり、今

³² Hague, 74.

も歩んでいる道です。そして教師はこの道に、自らのたましいの救いを扱いつつ、他の人たちのたましいをも導かなければならないのです。私たちは、私たちのために、もしくは私たちの親愛なる友人たちのために、このことを変えることはできませんし、変えようともしません。私たちが判断する限り、この道を通してのみ、神は背教の被造物を救うことがおできになるのです。それゆえに、読者のみなさん、皆さんがこの事について考えていただくように、真剣にお願いします。神のみ前に、この道に従うかどうかを、皆さんの心に答えさせてください。しかし、知っておいてください。この道を拒否するということは、あなたの永遠の死でもあるのです。

「天の下でこの御名」つまりナザレのイエスのほかに、「私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」(使徒4章12節)ですから、イエスご自身が私たちを救うこの道以外に、方法はないのです³³。

ドッドリッジは、この書籍を通して、この本を読むものが、キリストの福音を受け入れることを願っていた。それゆえに、これほどまでに情熱的にキリストの福音を訴えかけている。しかし、単なる改宗者を生み出すことが本書の執筆の目的ではないことは、この書物の構成を見るときに一目瞭然である。ドッドリッジにとって、ただ救いを受け入れるだけでは不十分であり、キリストの福音を受け入れたものが、襲ってくる誘惑を避け、その福音から外れることなく、神の臨在を常に意識し福音にふさわしい生活を送るようになることが、この書籍の執筆理由であると言えるだろう。

その例として、『勃興』の17章を見ると、例えばそこには「自らを献げる(祈りの)例」として、祈祷文が掲載されている。これはいくつもの祈祷の集合体としても捉えることが出来るが、そのうちの一部を見てみよう。

わたしを、さらに、あなたのみ形に造り変え、これから先、私の師、いけ

³³ Philip Doddridge, *The Rise and Progress of Religion in the Soul: Illustrated in a Course of Serious and Practical Addresses Suited to Persons of Every Character and Circumstance: With a Devout Meditation, or Prayer, Subjoined to Each Chapter*. Waymark Books: Cedar Lake, 2011.

にえ、私の仲裁者、私の主として認めることになる、イエスをほうふつとさせるものとなるようにしてください！私が切に望むのは、きよめ、勵まし、慰めを与えてくださるあなたの御霊のすべての必要な影響をあなたがお送りくださることです。そして、「あなたの御顔の光を、私たちの上に」もたらしてください。それによって、最も崇高な歓喜と「喜びが私の心に」もたらされるからです³⁴。

このように、ドッドリッジの著書は、単なる新生経験にとどまらず、その後の全的献身を伴った信仰生涯への示唆に富んでおり、また各章の巻末に付されている祈祷や霊想は、個人的にそれぞれの問題について思いを巡らす時に、最適なものが揃っている。ウィルバーフォースがこの本の章末の祈祷文を用いて個人的な祈りをささげたかどうか、それは知るべきがない。しかし、この本との出会い、そして、この本に関してミルナーと馬車の中で語り合った時を境にウィルバーフォースの内面も外面も変えられていったことを見る時、この本がウィルバーフォースに与えた影響は計り知れない。

この本の 19 章の題を見ると、「絶え間ない神との交わり、もしくは神の恐れの中に一日居るためのさらにいくつかの詳しい指示」とあり、その章の中心はドッドリッジが 1727 年にある青年に書き送った手紙である。その手紙の中で、ドッドリッジは、キリストに従う人が、一日をどのようにして神中心に過ごすかという事に関しての指示を事細かに書き記している。一言でまとめるなら、一日を神の臨在の中にどのようにふさわしく過ごすべきか、という書簡である。この章は一日の初め、日中の過ごし方、一日の締めくくり方、と三つにまず大きく区切ることができ、ドッドリッジの言葉を借りるならば、「私たちがどのように一日の初めに、日中に、一日の終わりに神を心に留めるべきか³⁵」という主題について詳細に論じられている。

一日の初めと終わりについては、かいつまんで言うならば、そこで求められているものは、密室である。そして、ヘイグも指摘していた通り、夜の場合は、自己吟味の時も求められている。この本は、主に未信者向けに書かれているが、

³⁴ Doddridge, 143.

³⁵ *ibid*, 153.

救いの経験の後のことも想定して書かれているとはいえ、その自己吟味の内容は現代の読者にとってもひとしく突き刺さる性質を含んだものである。少し引用してみる。

わたしは「神の御子への信仰によって」（訳注・今日を）生き（ガラテヤ2章20節）、キリストを私の教師そして支配者、わたしの贖罪そして仲裁者、わが模範そして私を守られる方、わが力そして私の前を走る方として認めていただろうか。私はこの日死と永遠を見つめ、自らの事を、恵みによって天国を期待することができるものとなった人として考えただろうか。[中略]今日私の心は神に対して、また人類に対して愛にあふれていたであろうか³⁶。

実際には自己吟味の内容はまだ続くのであるが、非常に細かくその日一日の行動を吟味することをドッドリッジは求めている。

次の20章でも内省的なトーンを保ったまま、神のさまざまな臨在の中を生きる術をドッドリッジは記しているが、その中に時間の使い方についての項目があるのですこし引用しておきたい。「これらの数多くの規則は簡単に実践できるものとして見えることだろう。もし人が時間の価値を学び、数多くの神のしもべが神にあって喜びをおぼえ、いのちの水を溢れるばかり飲んで黄金の時間を無駄にする不必要な睡眠から時を贖うことを学ぶなら、であるが。³⁷」時間の無駄遣いにドッドリッジは非常に厳しい姿勢で臨んでいる。さらにこの章では、他者の幸福のために、善行を行うことに飽いてはならないという指示も書かれている。20章を締めくくる祈禱文をここで少し引用する。

わたしが時間の価値を知ることができますように。また、あなたからの任務の中で、どれほど下等なものであっても、どれほど痛みを伴うものであっても、時間を最も最大限に効率よく用い続けることが出来ますように。あなたの栄光のために、おお主よ、人生の労働を求め続けることが出来ま

³⁶ ibid, 161.

³⁷ ibid, 166.

すように。そして気分転換の時もあなたの栄光のために探求されますように。「食べるにも、飲むにも、何をするにも」（第一コリント 10 章 31 節）あなたの栄光を現すことが常に視界の中にあり、達成されますように。そしてすべての気分転換と仕事からの解放が、さらに豊かな力と決意をもってあなたに仕える備えとなりますように！³⁸

これらの自己吟味についてもミルナーとウィルバーフォースは馬車の中で語り合ったに違いない。しかし、ここで確認しておかなければならないことは、ドッドリッジの本は、キリスト教に読者を改宗させるために書かれていたものであり、その根底にはキリスト教の福音があったことである。

たまたま手に取った本ではあったが、その本が「たまたま」そこにあったから、という歴史の偶然という事だけでウィルバーフォースの人生のこの時期を総括するのはあまりに短絡的である。ミルナーをウィルバーフォースが招いたこと、またドッドリッジの本を、ウィルバーフォースが何の気なしに手に取ったことなど、ただの偶然の連続とは言い難い。そして、先にも触れたとおり、ウィルバーフォースはこの本と出会ったことによって、聖書に、おそらく再び、触れることになるのであった。

ウィルバーフォースはこの本についてミルナーと議論しながらロンドンに戻り、国会の職務を果たし、もう一度ミルナーと旅に出る。今度の旅で、彼らが議論の材料にしたのは、ギリシア語の新約聖書だった。車中で、ウィルバーフォースは様々な信仰に関する疑問や質問をミルナーに投げかけるが、ミルナーはそれに一つ一つ丁寧に答えるのであった³⁹。ベルモンテは二人の間の対話をこう総括している「これらの議論の最終的な結果は、ウィルバーフォースが述べるころでは、『私の心の中におけるキリスト教の心理についての確信』であった。⁴⁰」さらにウィルバーフォースはこのようにも述懐している。「ミルナーは、他のすべての事柄については非常に軽かったけれど、この（訳注・宗教的な）事柄に関しては常に荘厳さを伴って語った。そして彼のすべての発言は

³⁸ *ibid.*, 172.

³⁹ Metaxas, 50.

⁴⁰ Belmonte, 77.

わたしの宗教への関心を増大させるものであった。⁴¹」

特筆すべきなのは、ウィルバーフォースの回心体験が一昼夜にして起こったものではない事だ。むしろ、彼の新生体験は、ゆるやかなうねりを伴うものであった。

しかし、ひとつだけ確かなことが言えるとすれば、それはミルナーとの対話を通して、ドッドリッジの作品や原典（コイナー）の新約聖書を基にして、信仰について対話する中で、ウィルバーフォースの中には確かな変化の兆しが現れていたという事だ。あくまでも、ゆるやかな動きであったが、ウィルバーフォースの心は、これらの流れを経て、神へと向いていった。

その変化の一端を、ウィルバーフォース自身の思いと行動から見る事が出来る。

「3、4日前に」10月25日に彼（ウィルバーフォース）が言うには、「かなり早い時間に起きるようになった。朝の孤高と自己対話の中で、いずれ何らかの形になると信頼する考えを持った。」—「真剣にこれらの事柄について思索を巡らしたと同時に、深い罪意識と、過去の私の人生に対する黒い忘恩の念が、最も濃い色彩で私に迫り、（訳注・過去に）貴重な時間、機会、才能を無駄にしたことで、私は自らを責めた。⁴²」

ミルナーとの対話を通して、ウィルバーフォースの中には確かな変革が起きていた。そして、彼が自ら述懐しているように、その変化は内的な側面にとどまらず、行動の変化にも表れていた。彼は（ドッドリッジの本で示されているように）早朝の静謐の時を持つことを始めただけでなく、「個人的な日誌をつけ始めた。そうすることによって、『彼が謙遜であり絶えず注意深くあるために⁴³。』」

ドッドリッジの本に触れ、ギリシア語の新約聖書を、当代随一の知性と、何も邪魔が入らない環境で、心行くまで議論したことの結果は、明らかだっ

⁴¹ Wilberforce et al. 87.

⁴² ibid. 88.

⁴³ ibid.89.

た。彼の心はもはや以前ではなかったことを見る事が出来る。彼の心はこの時期を境に「宗教的な」事柄に細心の注意を払うようになる。早朝の静謐の時や日誌の習慣などはその外的現れと言える。しかし、内面では彼は苦悶の時を過ごしていたことが、息子たちの伝記や、現代の伝記作家の筆によって明らかにされている。

「罰を受ける恐れというよりも、わが神、救い主の言い表すことができないほどのあわれみをこれだけの期間無視していた、という大きな罪深さにわたしは影響を受けた。そしてその思いがもたらしたものは、罪意識のゆえに、わたしが何か月も深いうつ状態に陥るという事だった。」と彼は言っている⁴⁴。

それまで向き合ってこなかった神と向き合い、ウィルバーフォースはそれまでの生き方を心底悔いるあまり、強烈なうつ状態を数か月にわたり発症している。しかし、このような症状は何もウィルバーフォースだけに見られる特殊な症状ではなかったようである。ベルモンテはこのように論じる。「ウィルバーフォースの霊的な危機状況は古典的なキリスト教の回心の徴を持っている。アウグスティヌスの『告白』を髣髴とさせる言語を使って彼はこのように書いている。『私は自らの危険な状態に対して目覚めなければならない。そして、神との平和を得るまでは絶対に休むわけには行かない』⁴⁵」

劇的な瞬間の回心、というよりも、ある期間を境に、取り返しのつかない自らの過去の怠惰を認識し、神との関係があるべき姿ではなかったことに目が開かれ、強烈なうつ状態に陥り、しばらくの間苦しみ、ウィルバーフォースは一時は政界を引退し宗教的な隠遁生活をする事まで考える。そして、彼はジョン・ニュートンなどに相談をし、徐々に落ち着きを取り戻していくのだが、ミルナーと過ごした時間の影響が、どれほどのものであったかを見る事が出来はしないだろうか。しかし、ここで特筆すべきなのはすべての背後に働いている神のご計画だろう。

⁴⁴ ibid, 89.

⁴⁵ Belmonte, 78.

アイザック・ミルナーは著名人ではあったかもしれないが、ウィルバーフォースが小さなころに知己を得ていなければ、1985年の旅の同伴者として招かれることはなかったはずである。そして、皮肉にもアイザックの兄をハルのグラマー・スクールの校長として招聘したのはほかならぬウィリアムの祖父であった。仮に、ウィルバーフォースがミルナーと旅をしていなければ、そこにはおそらく何の靈的变化も期待できなかったであろう。彼がこの旅を通じて経験したことを相談しにジョン・ニュートンの所に行くのだが、メタクサスはウィルバーフォースがニュートンしか頼る伝手がなかったとして、こう述べている。

考えさせられることに、ウィルバーフォースが知己を得ていた数百人の中で、メソジストの友人はひとりも見つからなかった。彼は完全にその世界から自らを隔離していたので、彼のその時の状況を理解してくれる人物を探し出すためには、言ってみれば、幼少時代にまで遡る必要があったのだ⁴⁶。

当時彼が陥った靈的葛藤を理解し、またそのことについて助言を与えることが出来る人物は、ウィルバーフォースの周辺には文字通り一人もいなかった。言いかたを変えれば、彼はそのような類の人物との付き合いを全く持っていなかったのだ。しかし、そのような時ですら、幼少時に自らに奴隷制の恐怖を教えてくれたジョン・ニュートンがそこにいたということには、繰り返しのようになるが、摂理的なものを感じざるを得ない。

1785年はウィルバーフォースにとって、靈的な覚醒の年となった。その年に、ミルナーと旅をし、ドッドリッジやギリシア語の新約聖書を巡って議論をしていなければ、未だに世界では公然と奴隷が売り買いされていたかもしれない。なぜなら、ウィルバーフォースの奴隷貿易廃止運動は、彼の信仰体験に密接に結びついているものであるからだ。

1787年の彼の有名な言葉に「全能の神が私のまえに二つの大きな目的を置かれた。奴隷貿易の撤廃と（社会的）マナーの改善である。⁴⁷」というものがあ

⁴⁶ Metaxas, 56.

⁴⁷ Wilberforce et al. 149.

る。ウィルバーフォースは、奴隷貿易の撤廃を、もう一つ彼が力を注いだイギリスの公衆マナーの改善と共に、神から与えられた使命として認識していた。ウィルバーフォースの息子たちによる伝記には、筆者たちの手によって「この精神で、彼（ウィルバーフォース）は抗争に立ち向かった。忘れられるべきでないのは、人間の自由の擁護者として彼を武装したのは、神への恐れであるという事だ。⁴⁸」というコメントが、上記の宣言の後に添えられている。

ミルナーと旅をするまでのウィルバーフォースは、神を意識しない人間であったとすれば、ミルナーとの旅を経て、ゆるやかな回心経験を経たウィルバーフォースはいまや神を恐れ、神を第一として歩む人間であった。奴隷貿易廃止への活動は、その神への純粋な恐れに端を発していることを忘れるべきではない。ドッドリッジの書物と新約聖書の議論がそこには重要な役割を果たしていることも忘れられるべきではないが。

ウェスレーが、どの程度、ウィルバーフォースの回心経験について詳細を知っていたかは定かではない。しかし、冒頭の手紙で記しているように、ウェスレーはウィルバーフォースが奴隷貿易廃止のために神によって選ばれた人間であることを、見聞することなどを通じ、感じ取っていたのだろう。ウェスレーも「奴隷制についての考え」という小論を記しているが、彼の持っていたメソジストの組織力をもってしても、彼の存命中にイギリスの奴隷貿易は廃止されることはなかった。

さて、ウィルバーフォースが奴隷貿易廃止についてはじめて声を上げた人物ではないことは指摘する必要がある。ウェスレーが上述の小冊子を記しているように、ウィルバーフォースに至るまでも、イギリス国内でトーマス・クラークソンやグランビル・シャープなどによって、奴隷貿易廃止への流れがあったことは事実である。ウィルバーフォースはそのような潮流の中であって、有力な国会議員としての立場からこの問題に取り組み、貿易の撤廃に漕ぎ着けた存在として認識できるのであって、決して彼だけが奴隷貿易廃止に関して尽力したというわけではない。さらに指摘するなら、ウィルバーフォースは孤軍奮闘でもなかった。クラップムという地域を中心に人脈を築き、それらの人脈

⁴⁸ *ibid.*, 149.

の援助もあって、ウィルバーフォースは奴隷貿易の撤廃という、ひいては奴隷制の廃止に結びつく功績をあげたと考えることがふさわしいだろう。

しかし、何よりも重要なのは、ウィルバーフォースの行動の源流には、1785年の霊的経験があるということである。もし1785年の覚醒経験がなければ、歴史に「もし」はあり得ないが、歴史自体が大きく変わっていた事すら可能性としては否定しきれない。

一般的な世界史的には、ウィルバーフォースは単にイギリスにおける奴隷貿易の廃止に貢献した国会議員という説明がなされるであろう。しかし、その本質的な部分を見ると、その背後にはキリスト教の強い影響があり、ウィルバーフォースの信仰経験なしに彼が奴隷貿易の廃止に向けて動くことはなかったという事が指摘されるべきである。それは、同時に、一人のクリスチャンとしての、ウィルバーフォースの行動が、世界の歴史を変えたという事でもなる。イギリスの奴隷貿易は、一人の人間の覚醒、イエス・キリストの信仰に至る回心体験によって、終止符が打たれることになった、ともいうことが出来るだろう。

ある意味でパウロ的ともいえるウィルバーフォースの回心体験は、その後の行動を見ると、理想的な教材ともなりうるのではないだろうか。私たちがウィルバーフォースの回心から学ぶ事はたくさんある。彼の回心後の生活の激変は、現代の私たちが見ても学ぶところが多い。エペソの信徒に向けてパウロが書いているように、「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」ウィルバーフォースの回心後の歩みは、まさに神が備えた良い行いを歩んだものではなかっただろうか。ウィルバーフォースは、単なる正義感や、議員としての点数稼ぎで奴隷貿易廃止に立ち向かったのではない。彼は、神の恐れの中に、一クリスチャンとして、神が備えたもう良い行いを自らの使命として捉え、奴隷貿易の廃止と社会のマナーの改善に立ち向かった。

幼いころから目が悪く（しばしば彼は誰かに本を朗読してもらわなければならないほどであった）、消化器系の病を抱え、その対処として阿片漬けにならないといけないほどの決して健康体ではなかったウィルバーフォースであった

が、彼はキリストのみかたちに倣うことを求め、奴隷貿易の廃止という十字架を背負い、その歩みを継続した。アタナシウスが受けたようなおおくの反対を彼も受けたはずである。しかし、アタナシウスが折れなかったように、ウィルバーフォースも折れることはなかった。なぜなら、その原点には、1785年のあの経験があるからであり、なによりも、神が共にいたからである。

(インマヌエル和歌山教会牧師)